

ポー・カレン語に形容詞という範疇は必要か?

加藤 昌彦
(大阪大学)

Is the category 'adjective' necessary in Pwo Karen?

KATO, Atsuhiko
Osaka University

Pwo Karen is one of the Karenic languages which is spoken in southern Burma (Myanmar) and western Thailand. Purser and Saya Tun Aung (1922) claims that Pwo Karen has nine parts of speech including adjectives and verbs. In this paper we will discuss whether the part of speech 'adjective' is necessary in describing the Pwo Karen morphosyntax, and conclude that the category 'adjective' is unnecessary, at least from the perspective of descriptive study of this language.

Keywords: adjective, stative verb, Pwo Karen, Karenic, Tibeto-Burman

キーワード：形容詞, 状態動詞, ポー・カレン語, カレン諸語, チベット・ビルマ諸語

1. 序論
2. 品詞分類
3. 動態動詞と状態動詞
4. 意志動詞と無意志動詞
5. まとめ

1. 序論

ポー・カレン語 (Pwo Karen) はシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) カレン語群 (Karenic) に属する言語である。チベット・ビルマ語派に属する諸言語の大部分は SOV の基本語順を持つが、その中にあって、ビルマ(ミャンマー)とタイで話されるカレン諸語は、すべての言語が SVO 型言語であるという点で特異である。ポー・カレン語も他のカレン系諸言語と同様に SVO の基本語順を持つ。動詞や名詞に屈折変化はなく、また、単語間の関係表示に語順が大きな役割を果たす。この点でポー・カレン語は孤立語的タイプの言語であると言ってよい。

ポー・カレン語の方言はビルマのイラワジ(エヤワディ)・デルタ周辺で話される西部方言群と、ビルマ・タイ国境地帯周辺で話される東部方言群に大別できる。

本稿で扱うポー・カレン語は、東部方言群のうち、ビルマ連邦カレン州の州都パアン (Hpa-an) 周辺で話される方言である。近隣のラインボエ (Hlaingbwe)、コーカレイ (Kawkareik) などの小都市で話される方言もパアン方言に含めて考えることができる。以降、本稿でポー・カレン語と呼ぶときにはパアン方言を指すものとする。

本稿の目的は、ポー・カレン語において形容詞という範疇を設定すべきかどうかをあらためて検証することである。ポー・カレン語の文法をごく簡単に記述した Purser and Saya Tun Aung (1922)¹ は、ポー・カレン語の品詞を、名詞 (nouns)、代名詞 (pronouns)、形容詞 (adjectives)、動詞 (verbs)、副詞 (adverbs)、前置詞 (prepositions)、接続詞 (conjunctions)、間投詞 (interjections)、助詞 (particles) の 9 種に分けている (Purser and Saya Tun Aung 1922:179)。すなわち、動詞と形容詞を別個の品詞として設定する。しかし、一方で次のようにも述べている (Purser and Saya Tun Aung 1922:189-190)。

Most of the roots which in English would be regarded as essentially adjectival in their signification, are in Karen considered as verbs. (英語ならば意味上本質的に形容詞と見なせるような語根の大部分は、カレン語においては動詞と考えられる。)

彼らの記述を見ていると、全体として西洋の伝統文法の枠組みに拘泥しつつも、ポー・カレン語の言語事実を前にそこから脱却すべきかどうかためらいを感じているように思える。動詞と形容詞の分類についても同様で、動詞と形容詞を別個の品詞として立てながらも、別の箇所ではそれを否定することを言っているのである。残念ながら Purser and Saya Tun Aung (1922) には、動詞と形容詞を別個の品詞として設定する根拠も、逆に形容詞のようなものをなぜ動詞と見なせるのかについての根拠も明確には示されていない。そこで本稿では、ポー・カレン語に形容詞を認めるべきか否かについて、この言語の記述研究という観点から、より詳細な議論をしてみようと思う。

2. 品詞分類

加藤 (2004) はポー・カレン語の品詞に、名詞 (noun)、動詞 (verb)、副詞 (adverb)、助詞 (particle)、感嘆詞 (interjection) の 5 つを設定した。感嘆詞は他の語と統語的な関係を持たない特殊な品詞である。これを除いた残り 4 つの品詞を区別するためのテストとして、(i) 単独で発話を構成することができる、(ii) 動詞助詞 (verb

¹ Purser and Saya Tun Aung (1922) に記述されているポー・カレン語は、西部方言をベースに、東部方言の要素を混在させたものになっている。したがって厳密に言えば、彼らの分析と本稿での東部方言の分析を単純に比較することはできない。しかし、西部方言と東部方言の形態統語法は相当部分共通しており、同一の言語学的分析法によって両方言の品詞分類を行ったならば、同じような結果が得られると考えてよい。したがって、ここで Purser and Saya Tun Aung (1922) を引用することには妥当性があると考えられる。

particle)² の生起を可能にする, (iii) 動詞の項になることができる, の3つを提案する。これらのテストに合致するかどうかを yes/no で示すと次のとおりである。

(1) 品詞の区別のためのテスト

| | (i) | (ii) | (iii) |
|----|-----|------|-------|
| 名詞 | yes | no | yes |
| 動詞 | yes | yes | yes |
| 副詞 | yes | no | no |
| 助詞 | no | no | no |

上記のテストはあくまでもこの言語の品詞の「定義」ではないことに留意されたい。各品詞の持つ様々な意味の特徴や形態統語的特徴のうち, それぞれを簡便に区別するための最も有効な特徴をテストとして用いているのである。

(i) は助詞とそれ以外の品詞を区別するためのテストである。名詞・動詞・副詞は単独で発話を構成することができる。例えば, 名詞 *phlòun* 「カレン人」, 動詞 *li* 「行く」, 副詞 *ləpòun* 「たくさん」は, それぞれ, 発話において単独で用いることが可能である。しかし, 単独で使用された助詞は発話として成立しない。例えば, *lə* は名詞に前置されて場所を表す助詞であるが, 発話においてこれを単独で用いることはない。*lə* は, 例えば *lə ləkòun* 「ヤンゴンで」のように, 後に名詞を従えなければ発話を構成することができないのである。

(ii) は単独で発話を構成することができる単語の中から動詞を選び出すためのテストである。動詞助詞は動詞と共に一つの構成素を形成する助詞である。この構成素を動詞複合体と呼ぶ。動詞助詞には動詞の前に置かれるものと後に置かれるものがあり, その数は50個以上に及ぶ。動詞助詞は動詞と共に共起してはじめて生起することができる。動詞助詞のうち, 動詞の前に置かれて非現実 (irrealis) を表す *mə* を例にとると, 次のように, 動詞は *mə* の生起を可能にするが, 名詞や副詞は *mə* の生起を可能にしない³。

- (2) *mə* *li*
 (非現実) 行く [動詞]

² 動詞助詞は, 加藤 (2004) において設定した7種類の助詞のうちの一つで, 「動詞と共に共起してはじめて現れることのできる助詞」と定義できる。7種類の助詞とは, 側置助詞 (adpositional particle), 従属節助詞 (subordinate clause particle), 一般助詞 (general particle), 名詞修飾助詞 (noun modifying particle), 動詞助詞 (verb particle), 副助詞 (adverbial particle), 文助詞 (sentence particle) である。

³ 動詞助詞は動詞と共に共起してはじめて現れることのできる助詞である。一方, ポー・カレン語には側置助詞 (adpositional particle) や名詞修飾助詞 (noun modifying particle) など, 名詞句と共に共起することで出現可能な助詞がある。であれば, 単独で文を形成することができる単語の中から名詞を特定するためのテストとして, 側置助詞や名詞修飾助詞の出現を可能にするか否かを見るという方法が可能かということ, そうではない。なぜなら, 動詞は (iii) の基準に見るように, 主語や目的語になることができる。これはすなわち文中で名詞句の役割を担っているということである。動詞が文中で名詞句の役割を担う場合に, 側置助詞や名詞修飾助詞が共起することがある。したがって, この方法を, 名詞を特定するテストとして用いることはできない。なお, ポー・カレン語において名詞と動詞の境界線は極めて明瞭であり, 動詞と名詞の間に位置付けられるような語は存在しない。

「行くだらう」

- (3) **mə* *phlòvN*
(非現実) カレン人 [名詞]
- (4) **mə* *ləpòvN*
(非現実) たくさん [副詞]

(iii) は単独で発話を構成することができる単語の中から副詞を選び出すためのテストである。名詞や動詞は、動詞の項すなわち主語や目的語になることができるが、副詞は主語や目的語になることができない。下の (5) と (6) は、それぞれ、名詞および動詞が主語として現れた例である⁴。しかし、副詞は (7) に示すように主語になることができない。

- (5) *phlòvN* ?ó
人 [名詞] ある
「人がいる」
- (6) *li* *jô*
行く [動詞] 容易な
「行くのは簡単だ」
- (7) **ləpòvN* ?ó
たくさん [副詞] ある

筆者が妥当と考えるポー・カレン語の品詞分類は以上に述べたとおりである。もしポー・カレン語に形容詞という品詞を認めるとするならば、ここで動詞に分類したもののうち、状態を表すものを形容詞と呼ぶことになるだろう。以下ではこのことの是非について考察を進める。

3. 動態動詞と状態動詞

ポー・カレン語の動詞は語彙的アスペクトの観点から、動態動詞 (active verb) と状態動詞 (stative verb) に分けることができる。Vendler (1967) の用語を用いて定義すれば、動態動詞は活動 (activity), 完成 (accomplishment), 達成 (achievement) のいずれかを表す動詞であり、状態動詞は状態 (state) を表す動詞である。動態動詞と状態動詞は、副詞の *phléphlé* 「速く (fast), 早く (early)」または *xèxè* 「ゆっくり (slowly), 遅れて (late)」で修飾できるかどうかによって区別することができる。こ

⁴ 動詞が項として現れる現象は、正確には、一個の動詞から成る補文が主語や目的語の位置に現れた現象と捉えるべきである。なぜなら、項になった動詞のまわりには様々な名詞補語が現れることができるからである。例えば、*hə khlàin phlòvN jô* (1pl 話す カレン 容易な) 「私達がカレン語を話すことは容易だ」。

のいずれかの副詞で修飾することができれば動態動詞，修飾することができなければ状態動詞である。例えば，*yà̀yò̀n*「壊れる」は *yà̀yò̀n phléphlé*「速く（早く）壊れる」のように *phléphlé* で修飾することができるので動態動詞である。一方，*khō*「暑い」は **khō phléphlé* が言えないことから，状態動詞である。他に例を挙げれば，*?án*「食べる」，*chînà̀n*「座る」，*klí*「走る」，*yà̀yò̀n*「壊れる」，*lànthé*「落ちる」，*thà̀nán*「忘れる」，*yán*「泣く」などは動態動詞であり，*khō*「暑い」，*chôn*「甘い」，*thô*「長い」などは状態動詞である。

さて，もしポー・カレン語に「形容詞」という範疇を設定するとすれば，ここで状態動詞に分類した動詞群に形容詞というラベル付けをすることになるだろう。そうすることがポー・カレン語の記述において意義あることなのかを考えるには，動態動詞と状態動詞の両方に共通する特徴と，動態動詞か状態動詞かで異なる特徴をつぶさに見ていくのが良い。もし，動態動詞か状態動詞かで異なる特徴のほうが重要であり，それゆえこの言語を記述する上で状態動詞に形容詞というラベル付けをしたほうがこの言語の形態統語現象を正しく捉えることができるということになれば，形容詞という品詞を設定すればよいだろう。逆に，動態動詞と状態動詞の両方に共通する特徴のほうが重要であるならば，形容詞という範疇は設定しないほうがよい。以下，まず動態動詞と状態動詞の共通点を観察し，次に，動態動詞と状態動詞の相違点を観察する。

3.1. 動態動詞と状態動詞に共通する特徴

まず動態動詞と状態動詞に共通する特徴を見ていく。

3.1.1. 述語としての出現位置

動詞を主要部とする節において，節内の基本的要素は次のような順番で配列される。括弧でくくった要素は任意の要素である。

(主語名詞句)–動詞述語–(目的語名詞句)–(副詞的要素)

副詞的要素は，副詞や，側置助詞（他言語の側置詞に相当するもの）に導かれて現れる名詞句などを含む。副詞的要素は複数個現れ得る。節内に現れた名詞句や動詞のまわりには様々な助詞が現れ得る。

さて，上掲の基本的要素のうち動詞述語の位置には，動態動詞と状態動詞が同じように現れる。(8)は動態動詞の例，(9)は状態動詞の例である。それぞれの(a)は自動詞，(b)は他動詞の例である。

- (8) (a) *thà̀khléin klí*
 (人名) 走る
 「タークレインは走っている」⁵

⁵ この例文は他にも「走る」「走った」「走っていた」などの日本語を用いて訳すことが可能である。ポー・カレン語の動詞文は通常，非現実を表す動詞助詞 *mə* が現れていなければ，過去あるいは現在の事象を表す。ま

(b) *θàkhléin dũ còʔéphlòun*

(人名) 殴る (人名)

「タークレインはチョーエープロンを殴っている」

(9) (a) *θàkhléin xwē*

(人名) 痩せている

「タークレインは痩せている」

(b) *θàkhléin θàmé còʔéphlòun*

(人名) 恐がる (人名)

「タークレインはチョーエープロンを恐れている」

このように、動態動詞と状態動詞の述語としての出現位置はまったく同じである。すなわち主語名詞句の後に現れ、他動詞の場合には目的語名詞句を後に従える。重要なのは、状態動詞を述語として用いるときに、英語のような一部の現代印欧語における形容詞の叙述用法のように繫辞動詞などが必要となる現象はないということである。

3.1.2. 名詞の修飾の仕方

名詞を修飾するとき、動態動詞であれ状態動詞であれ、動詞は名詞の後に置かれて名詞を修飾する。(10)は動態動詞の例、(11)は状態動詞の例である⁶。

(10) *phlòun tháunlī*

人 踊る

「踊っている人」

(11) *thī phàn*

水 清らかな

「清らかな水」

上例のような、名詞を修飾する単独の動詞は、加藤(2001)で示したとおり関係節の一種と捉えられる。ポー・カレン語には主名詞に前置される関係節と後置される関係節があるが、単独の動詞は常に名詞に後置される。名詞を修飾する関係節の述語動詞が動態動詞であるか状態動詞であるかによって関係節の振る舞いが異なることはない。

3.1.3. 動詞連続

動詞連続 (verb serialization) とは、二つ以上の動詞が動詞間の関係を表す標識なしに並ぶ現象である。二つの動詞からなるものを基本と考え、前の動詞を V1、後の動詞を V2 で表す。ポー・カレン語には2種類の動詞連続がある。一つは連結型

た、あらゆる動詞は他の形式の助けを借りることなく、言及時点における事象の継続を表すことができる。

⁶ (10)と(11)はそれぞれ、「人が踊っている」「水が清らかだ」の意を表すこともできる。

動詞連続で、V1 と V2 の間に名詞句や副詞的要素の介在を許さない。もう一つは分離型動詞連続で、V1 と V2 の間に名詞句や副詞的要素が現れることがある。動詞連続についての詳細は、加藤 (1998) や加藤 (2004:201-275) を見られたい。

動詞連続に参加する動詞は動態動詞でも状態動詞でもあり得る。下の二つの例は連結型動詞連続の例である。(12) の V1 は *lànthé* 「落ちる」、V2 は *θi* 「死ぬ」で、共に動態動詞である。しかし、(13) の V1 は動態動詞 *ʔáunthán* 「たまる」であるが、一方の V2 は状態動詞 *xwè* 「満ちた」であり、同じ動詞連続の中に動態動詞と状態動詞が現れている。

- (12) *mə lánthé θi*
 (非現実) 落ちる 死ぬ
 「落ちて死ぬだろう」(III-12.30)

- (13) *méthi ʔáunthán xwè ʔəkhwàn phàn*
 涙 たまる 満ちた 眼窩 中
 「涙が目にとまっていっぱいになった」(V-01.78)

また、次の二つの例は分離型動詞連続の例である。どちらの例においても V1 として動態動詞の *ʔə* 「飲む」が使われている。V2 には、(14) では動態動詞の *θi* 「死ぬ」が使われており、(15) では状態動詞の *màn* 「酔った」が使われている。

- (14) *ʔə θai θi*
 飲む 酒 死ぬ
 「酒を飲んで死ぬ」

- (15) *ʔə θai màn*
 飲む 酒 酔った
 「酒を飲んで酔っぱらった」

このように、連結型動詞連続であれ分離型動詞連続であれ、動詞連続には動態動詞と状態動詞のどちらもが参加することができるのである。

3.1.4. 動詞助詞

既に述べたとおり、動詞助詞 (verb particle) は、動詞の前あるいは後に現れて動詞と共に一つの構成要素を形成する助詞であり、動詞が存在しなければ生起できない。動詞助詞の数は 50 個以上に及ぶ。この中には、3.2.4, 3.2.5, 3.2.6, 3.2.7 で見るように動詞との共起関係において選択制限を示すものもあるが、多くはすべての動詞と共起し得る。下にいくつかの例を挙げる。

mə は非現実 (irrealis) を表す動詞助詞であり、動詞の前に現れる。未来において生起する事象を表すためには基本的にこの動詞助詞を用いなければならない。例えば、*mə ʔán* (‘非現実’ 食べる) 「食べるだろう」、*mə xilà* (‘非現実’ 美しい) 「美しいだろう」。*ʔán* は動態動詞の例、*xilà* は状態動詞の例である。

lə は否定を表す動詞助詞であり、動詞の前に現れる。ポー・カレン語では、従属節の否定にはこの *lə* が使われ、主節の否定には 3.1.5 で述べる *ʔé* が使われる。例えば、*lə ʔán* (‘否定’ 食べる)「食べないこと」、*lə xilà* (‘否定’ 美しい)「美しくないこと」。

bá は当為を表す動詞助詞であり、動詞の前に現れる。例えば、*bá ʔán* (‘当為’ 食べる)「食べなければならない」、*bá xilà* (‘当為’ 美しい)「美しくなければならない」。

báθà は欲求を表す動詞助詞であり、動詞の後に現れる。例えば、*ʔán báθà* (食べる ‘欲求’)「食べたい」、*xilà báθà* (美しい ‘欲求’)「美しくなりたい」。

wê は強意を表す動詞助詞であり、動詞の後に現れる。例えば、*ʔán wê* (食べる ‘強意’)「食べるのだ」、*xilà wê* (美しい ‘強意’)「美しいのだ」。

dáchəθà は詠嘆を表す動詞助詞であり、動詞の後に現れる。例えば、*ʔán dáchəθà* (食べる ‘詠嘆’)「(ずいぶん) 食べるなあ」、*xilà dáchəθà* (美しい ‘詠嘆’)「美しいなあ」。

上に挙げたもののうち、非現実を表す *mə* と否定を表す *lə* は使用頻度が極めて高く、その意味で重要である。

3.1.5. 副助詞

副助詞 (adverbial particle) は動詞句の後に現れて副詞的に動詞句を修飾する助詞である。動詞助詞と同様、副助詞も、動詞が存在していなければ生起できない。副助詞には十数個が見つかっており、いずれの副助詞もすべての動詞と共起可能である。以下にいくつか例を示す。

ʔé は否定を表す。従属節の否定には 3.1.4 で述べた *lə* が用いられるが、主節の否定にはこの *ʔé* が用いられる。下に例を挙げる。(16)の動詞 *ʔán*「食べる」は動態動詞、(17)の動詞 *khlàv*「暇な」は状態動詞である。

(16) *chəpəichəjá θí ʔán wê ʔáʔá ʔé*
 肉 も 食べる (強意) たくさん (否定)
 「(祖父は) 肉もたくさんは食べない」(II-08.14)

(17) *yámú khlàv ʔé*
 おばさん 暇な (否定)
 「おばさんは暇ではない」(IV-04.327)

ləxì は禁止を表す。(18)の *ʔán*「食べる」は動態動詞、(19)の *kətə*「心配な」は状態動詞である。

(18) *ʔán mì dè cúcí ləxì*
 食べる ご飯 ~で 左手 (禁止)
 「左手でご飯を食べるな」(I-sen.14)

- (19) *kətò chò nàN mèiN ləxì*
 心配な物 ~も種類 (禁止)
 「何も心配するな」(III-15.18)

mā は程度が甚だしいことを表す。(20) の *ʔánjâ* 「謝る」は動態動詞, (21) の *yi* 「良い」は状態動詞である。

- (20) *jə ʔánjâ mā ló*
 1sg 謝る たいへん (断定)
 「私は強く謝りたい」(006.69)
- (21) *ləniʝò jə chəbóUN yi mā*
 今日 1sg 運 良い たいへん
 「今日私は非常に運が良い」(I-09.16)

このように、副助詞は動態動詞とも状態動詞とも共起する。このうち否定を表す *ʔé* は使用頻度が極めて高く、その意味で重要である。

3.1.6. 接頭辞 *ʔə-*

ポー・カレン語には動詞を名詞化する生産性の高い接頭辞 *ʔə-* がある。これは様々な種類の動詞に付く。(22) と (23) は動態動詞に付いた例, (24) は状態動詞に付いた例である。

- (22) *ʔədà* 「敷物」 ← *ʔə-* + *dà* (敷く)
 (23) *ʔəkhú* 「煙」 ← *ʔə-* + *khú* (煙る)
 (24) *ʔəchá* 「傷」 ← *ʔə-* + *chá* (痛い)

3.2. 動態動詞と状態動詞とで異なる特徴

次に動態動詞と状態動詞の相違点を見ていく。

3.2.1. 接頭辞 *ʔè-*

接頭辞 *ʔè-* は、状態動詞に付いて動詞を副詞化する接辞である。下に例を示す。

- (25) *ʔèyi* 「良く」 ← *ʔè-* + *yi* (良い)
 (26) *ʔèphlé* 「速く」 ← *ʔè-* + *phlé* (速い)
 (27) *ʔèthî* 「正確に」 ← *ʔè-* + *thî* (正確な)

ʔè- は基本的に動態動詞には付かない。しかし、一つだけ例外が見つかっている。*ʔèláv* 「全部」は動態動詞 *láv* 「尽きる」に *ʔè-* が付いたものである。

3.2.2. 繰り返し

3.2.1 で示した接頭辞 ?è- による造語法と同じく状態動詞を副詞化する形態法として繰り返し (reduplication) がある。3.2.1 に挙げた動詞と同じ動詞を用いて例を示すと, yìyì 「良く」 phléphlé 「速く」 thíthí 「正確に」 のようになる。接頭辞 ?è- とは異なり, 副詞を作る繰り返しが動態動詞に適用された例はまったく見つかっていない。接頭辞 ?è- と繰り返しには, 繰り返しのほうがより口語的という違いがある。

3.2.3. 接頭辞 phà-

接頭辞 phà- は 1 音節からなる状態動詞に付いて程度の甚だしさを表す。動態動詞に phà- は付かない。

(28) phádú 「大変大きい」 ← phà- + dú (大きい)

(29) phàpî 「大変小さい」 ← phà- + pî (小さい)

(30) phàjàin 「大変遠い」 ← phà- + jàin (遠い)

3.2.4. 状態変化を表す動詞助詞 thán と làn

動詞助詞 thán と làn⁷ は, 状態動詞に後続するとその状態動詞が表す状況への変化を表す。下に例を示す。

(31) kə̀lò̀uNkə̀mà ʔá thán chī bá
仕事 多い thán (婉曲) (疑問)
「仕事が増えたのですか？」(011.8)

(32) ló chə̀ phàn thán lə̀ khô
(場所) 物 明るい thán — ~面
「(明け方) 明るくなってきたときに」(II-02.15)

(33) chə̀ mə̀ khài làn ló
物 (非現実) 暗い làn (断定)
「暗くなるよ」(I-06.81)

(34) bê pə̀ tə̀wân phèn chə̀cə̀uchə̀châ mə̀ cə̀ làn thò
(目的) 1pl 村 中 病気 (非現実) 少ない làn (目的)
「私達の村の中に病気が少なくなるように...」(V-01.110)

thán は動詞 thán 「上る」に由来し, làn は動詞 làn 「下る」に由来する。この二つの動詞助詞は状態変化を表すという点で同じ機能を持つのだが, 何かが増加

⁷ thán は lán, bán と同音される。同様に làn は bán と同音される。

する場合には *thán* が使われ、何かが減少する場合には *làn* が使われるという傾向がある。例えば、*ʔá*「多い」には *thán* が付き、*cà*「少ない」には *làn* が使われる。詳細については加藤 (2004:292-294) を参照されたい。

thán と *làn* は動態動詞と共に使われても上記のような意味を表さず、基本的には、*thán* は上方へ向かう動作、*làn* は下方へ向かう動作を表す。

(35) *lì thán wê ló yéin phèn*
 行く *thán* (強意) (場所) 家 中
 「家の中へ上がっていった」(V-01.76)

(36) *ʔə wēkhwâ bàu làn mì*
 3sg 兄 よそう *làn* ご飯
 「彼のお兄さんはご飯をよそった」(II-14.22)

3.2.5. 判断の基準点を表す動詞助詞 *bá*

動詞助詞 *bá* は状態動詞に後続して、「～にとって...だ」という意味を表す。この動詞助詞が現れると判断の基準点を表す名詞句が目的語として現れることができる。この動詞助詞は動態動詞とは共起しない。

(37) *máuv bá ʔə lə blàn*
 心地よい *bá* 3sg — ～回
 「(そのことは) かつては彼にとって楽しかった」(V-04.31)

(38) *làlav mūmì bá ʔán dè jáʔúthî jò təmjàn bá nè*
 月末 日 (当為) 食べる ～で 魚醬 (主題) 奇妙な *bá* 2sg
vá
 (疑問)

「月末(の給料日)に魚醬(だけ)で(ご飯を)食べることが、あなたにとってはそんなに奇妙なのですか？」(V-03.141)

3.2.6. 比較を表す動詞助詞 *dá* と *náin*

動詞助詞 *dá* と *náin* は状態動詞に後続して比較を表す。これらの動詞助詞が現れると、比較対象を表す名詞句が目的語として現れることができる。*dá* と *náin* の違いは、*náin* を使うと「古くさい」表現になるということである。この二つの動詞助詞は動態動詞とは共起しない。

(39) *ʔəjò yì dá ʔəʔò*
 これ 良い *dá* あれ
 「これはあれより良い」

- (40) *cōkhléin wê ké phlòunkhwâ nó khánkhâ cà dá*
 (人名) 3sg 成る 男 ~なので 踏み出す 広い dá
xîphàn òè dài
 (人名) (複数) まだ

「チョークレインは男性だから、ファイパウン達よりも歩幅が広い」
 (IV-04.259)

- (41) *nò thô náin nâ*
 □ 高い náin 鼻

「口が鼻より高い」(「おしゃべりであることを表す慣用表現」)

3.2.7. 最上を表す動詞助詞 *tháú*

動詞助詞 *tháú* は状態動詞に後続して「最も～だ」という意味を表す。この動詞助詞は動態動詞とは共起しない。

- (42) *ʔə mèin dǔ tháú*
 3sg 名 大きい *tháú*

「彼は一番有名だ」(V-06.30)

3.3. 状態動詞を特別扱いすることの是非

以上、動態動詞と状態動詞の共通点と相違点を見てきた。ポー・カレン語の状態動詞に形容詞というラベル付けをし、動詞とは別個の範疇として認めるべきかどうかは、動態動詞と状態動詞とで異なる特徴がポー・カレン語の形態統語論の中でどれほどの重要性を持つかを見ることによって判断することができるだろう。

動態動詞と状態動詞とで異なる特徴を見てみると、3.2.1(接頭辞 *ʔə-*)、3.2.2(繰り返し)、3.2.3(接頭辞 *phà-*) で述べた現象は特定の接辞あるいは形態法に関わる現象であり、3.2.4(状態変化を表す動詞助詞 *thán* と *làn*)、3.2.5(判断の基準点を表す動詞助詞 *bá*)、3.2.6(比較を表す動詞助詞 *dá* と *náin*)、3.2.7(最上を表す動詞助詞 *tháú*) で述べたことは特定の助詞に関わる現象である。すなわち全体として特定の形態素に関わる現象ばかりであると言える。

一方、動態動詞と状態動詞に共通する特徴を見てみると、3.1.1(述語としての出現位置)と3.1.2(名詞の修飾の仕方)と3.1.3(動詞連続)で見た現象は、特定の形態素に限定されない統語現象である。3.1.4(動詞助詞)、3.1.5(副助詞)、3.1.6(接頭辞 *ʔə-*) で見た現象は、特定の形態素に関わる現象に相違ないけれども、3.1.4 で見た助詞の *mə* は未来の事象を述べるために使われる極めて重要な形態素であるし、3.1.4 で見た助詞 *lə* と3.1.5 で見た助詞 *ʔé* は否定という、文の表す命題そのものに関わる形式である。動態動詞と状態動詞に共通する特徴のうち、特に「述語としての出現位置」と「名詞の修飾の仕方」は、ポー・カレン語の文の組み立ての根本に関わる非常に重要な特徴であると言える。こうして見てみると、状態動詞と動態動詞に共通する特徴と異なる特徴を比べたとき、共通する特徴のほうに形態統

語論的により高次のレベルの現象が多いのは明らかであろう。

もしポー・カレン語の状態動詞を形容詞と呼び、動態動詞を動詞と呼ぶならば、例えば単に「主語名詞句は動詞の前、目的語名詞句は動詞の後に現れる」と記述すればよいところを、「主語名詞句は動詞あるいは形容詞の前、目的語名詞句は動詞あるいは形容詞の後に現れる」としなければならなくなる。また、「動詞は名詞を後から修飾する」と記述すればよいところを、「動詞と形容詞は名詞を後から修飾する」としなければならなくなる。つまり、文の組み立ての根本に関わる重要な特徴についての記述が煩雑になってしまう。動詞と形容詞を包含する「用言」のような概念を設定すれば簡潔な記述が一応は可能になるけれども、そうすると別個の範疇を設定することになってしまい、やはり煩雑さを免れない。状態動詞を形容詞として特別扱いすると、デメリットを生じることになるのである。逆に、形容詞という範疇を認めた場合の利点は特に思い当たらない。3.2 で見た特定の形態素の記述は、形容詞という範疇を立てずとも、状態動詞という動詞の下位範疇を設定しておけば、何の問題もなく可能である。したがって、状態動詞には形容詞というラベル付けをせず、動詞の下位範疇にとどめておくほうがよいと思われる。

形容詞という品詞を設定すべきでないという主張をさらに裏付ける事実がある。それは、ポー・カレン語の動詞の意味的な下位分類に動態動詞/状態動詞とは別に意志動詞/無意志動詞という下位分類を設定することができるという事実であり、このことが形容詞という範疇を設定することの根拠をさらに弱めることになる。次節ではこの問題について論じる。

4. 意志動詞と無意志動詞

ポー・カレン語の動詞を意味的な観点から状態動詞/動態動詞とは別の方法で分類することが可能である。それは、意志動詞 (volitional verb) であるか無意志動詞 (non-volitional verb) であるかという意志性 (volitionality) による分類である。ポー・カレン語では、動詞の表す事象が意志的なものか否かが語彙のレベルで指定されている⁸。例えば、*jə ʔán* (1sg 食べる) という文における「食べる」という動作は、常に「私」が意志的に行ったものと解される。この文は「うっかり食べた」という状況を表すことができない。もし「うっかり食べた」ということが言いたければ、*jə ʔán bá* のように無意志的動作を表す動詞助詞 *bá* を動詞の後に置く必要がある。逆に、*jə lánthîphā* (1sg 転ぶ) という文における「転ぶ」という動作は、常に無意志的なものと解され、この文が「故意に転ぶ」という状況を表すことはない。もし「故意に転ぶ」ということが言いたければ、使役助詞と再帰を表す表現を用いて「私は自分を転ばせた」とような言い方をする必要がある。

意志動詞か無意志動詞かを見るために加藤 (2004) は二つのテストを提案した。第一は、他の形式の助けなしに動詞単独で命令文になれるかどうかである。命令

⁸ 東南アジア大陸部の言語には、動詞の表す事象が意志的なものか否かが形態統語現象に大きく関わっている言語が多い。例えば隣接するタイ語がその例である (坂本 1994, 峰岸 2007 参照)。

文になれば意志動詞，命令文になれば無意志動詞と認定できる。例えば，*ʔán* はこれだけで「食べよ」という意味の命令文として用いることができるので意志動詞である。一方，*lànthîphā* はこれ単独で「転べ」という命令文として用いることができないので無意志動詞である。第二は，動詞の前に現れて使役を表す動詞助詞 *mà* と共起できるか否かである。共起できなければ意志動詞，共起できれば無意志動詞である。例えば，**mà ʔán* は不適格なので *ʔán* は意志動詞と認定でき，*mà lànthîphā* 「転ばせる」は適格なので *lànthîphā* は無意志動詞と認定できる。意志動詞を用いて使役表現を作るには，*mà* の代わりに，意志動詞および無意志動詞のどちらとも共起できる動詞助詞 *dàv* を用いる必要がある。すなわち「食べさせる」は *dàv ʔán* と言う⁹。

ところで，*lì*「行く」，*yê*「来る」などの移動を表す動詞や，*nī*「笑う」，*yán*「泣く」などの生理現象を表す動詞は命令文になれるにもかかわらず *mà* と共起できる。これは，これらの動詞が意志動詞としても無意志動詞としても指定されているためであると考えられる。事実，例えば *jə yán* (1sg 泣く)「私は泣いた」という文は，意志的に泣いたことも表せるし，つい泣いてしまったことも表せる。つまりこれらの動詞は意志動詞としても無意志動詞としても用いることができるのである。

さて，意志性は語彙的アスペクトとどのような関係にあるのか。以下にいくつかの動詞の例を挙げ，それぞれの動詞について，動態動詞であるか状態動詞であるかという語彙的アスペクトによる分類と，意志動詞であるか無意志動詞であるかという意志性による分類とを示す。

(43) 動詞の語彙的アスペクトと意志性

| | 語彙的アスペクト | 意志性 |
|---------------------|----------|------------|
| <i>ʔán</i> 「食べる」 | [動態] | [意志] |
| <i>chínàn</i> 「座る」 | [動態] | [意志] |
| <i>klí</i> 「走る」 | [動態] | [意志] |
| <i>yàvòn</i> 「壊れる」 | [動態] | [無意志] |
| <i>lànthé</i> 「落ちる」 | [動態] | [無意志] |
| <i>thánán</i> 「忘れる」 | [動態] | [無意志] |
| <i>yán</i> 「泣く」 | [動態] | [意志 / 無意志] |
| <i>khū</i> 「暑い」 | [状態] | [無意志] |
| <i>chôn</i> 「甘い」 | [状態] | [無意志] |
| <i>thô</i> 「長い」 | [状態] | [無意志] |

意志性と語彙的アスペクトの組み合わせは，「動態 - 意志」「動態 - 無意志」「動態 - 意志 / 無意志」「状態 - 無意志」の4種類がすべてである。うち「動態 - 意志

⁹ 使役を表す動詞助詞 *mà* と *dàv* の本質的違いは以下の通りである。*mà* は使役者が被使役事象に対して直接的コントロールを持つ場合に用いられ，*dàv* は使役者が被使役事象に対して直接的コントロールを持たない場合に用いられる。

／無意志」は、「動態 - 意志」「動態 - 無意志」のどちらにもなり得るということであるから、語彙的アスペクトと意志性の組み合わせには次の ABC の 3 種類しかないということになる。

(44) 語彙的アスペクトと意志性の組み合わせ

- A) [動態] [意志]
- B) [動態] [無意志]
- C) [状態] [無意志]

もし状態動詞に形容詞というラベル付けをし、動態動詞に動詞というラベル付けをするならば、C 類は形容詞であり、A 類と B 類は動詞である。注目したいのは、B 類の存在である。この類の動詞は、無意志動詞であるという点で C 類と共通点を持つ。したがって、C 類を形容詞とし、A 類と B 類を動詞としたならば、無意志動詞としての特徴を持つ単語は形容詞と動詞の二つの品詞にまたがって存在することになってしまう。意志性による動詞分類があまり意味を持たないのであればそれでも良いだろう。しかし、意志動詞／無意志動詞の分類はこの言語の形態統語論において相当な重要性を帯びている。具体的には少なくとも次のような点においてである。

- (i) 意志動詞は動詞単独で命令文になれるが、無意志動詞は動詞単独で命令文になれない。
- (ii) 使役構文において意志動詞／無意志動詞の区別が意味を持つ。
- (iii) 動詞連続において意志動詞／無意志動詞の区別が意味を持つ。

最初の (i) の命令文になれるかなれないかは、先述の意志動詞か無意志動詞かを見るための第一のテストそのものである。

次の (ii) は、使役を表す動詞助詞 *mà* と共起できるか否かという第二のテストそのものを含む問題である。Kato (1999) で論じたように、ポー・カレン語には使役構文と呼ぶことのできる構文が二つあり、それらを Type 1 および Type 2 と呼ぶ。Type 1 の使役構文は主に、使役を表す動詞助詞によって作られる。4 個ある使役助詞のうち、動詞 *mà* 「する」に由来する動詞助詞 *mà* と動詞 *lò* 「語る」に由来する動詞助詞 *lò* は、動詞が無意志動詞であることを要求する。下に *mà* を用いた例文を挙げておく。

- (45) *jə mà θi ?əwê*
 1sg *mà* 死ぬ 3sg
 「私は彼を殺した」

- (46) *jə mà cò châin*
 1sg *mà* 濡れた シャツ
 「私はシャツを濡らした」

(45) の動詞 *θî* 「死ぬ」と (46) の動詞 *có* 「濡れた」はどちらも無意志動詞である (*θî* は動態動詞であり, *có* は状態動詞であることに注意されたい)。一方, Type 2 の使役構文は補文を取るタイプの使役構文である。このタイプの使役構文は補文の中の動詞が意志動詞であることを要求する。したがって, 補文の中に意志動詞 *mà* 「する」を用いた (47) は適格であるが, 無意志動詞 *lànthîphā* を用いた (48) は非文である。

(47) *jə ʔánmân [ʔəwê mà kəlôun]*
 1sg 命じる 3sg する 仕事
 「私は彼に仕事をするように命じた」

(48) **jə ʔánmân [ʔəwê lànthîphā]*
 1sg 命じる 3sg 転ぶ
 (*私は彼に転ぶように命じた)

このように, 使役構文においては Type 1 においても Type 2 においても動詞の意志性が重要な意味を持つ。

最後に (iii) について。3.1.3 で述べたように, 動詞連続には連結型動詞連続と分離型動詞連続がある。実は, 分離型動詞連続の V2 は常に無意志動詞でなければならない。したがって, (14) の V2 *θî* 「死ぬ」は動態動詞であり, (15) の V2 *màn* 「酔った」は状態動詞であるけれども, 実はこの二つの動詞は無意志動詞であるという点で共通性を持っているのである。下の (49) は, 分離型動詞連続の V2 に *thóunlī* 「踊る」という意志動詞を用いているため, 非文である。もし「酒を飲んで踊った」ということを表現したければ, もはや動詞連続を使うことはできず, 例えば (50) のように従属節標識を用いた表現を用いなければならない。

(49) **ʔə θài thóunlī*
 飲む 酒 踊る

(50) *ʔə θài yòn thóunlī*
 飲む 酒 ~してから 踊る
 「酒を飲んでから踊った」

また, 連結型動詞連続にも意志性が重要な意味を持つ現象がある。連結型動詞連続において「他動詞 + 自動詞」という組み合わせが現れたとき, 次の (51) のように, 動詞連続は使役的な意味を持つ。

(51) *jə dú θi thwí*
 1sg 殴る 死ぬ 犬
 「私は犬を殴り殺した」

このような「他動詞 + 自動詞」という組み合わせの場合, V1 は常に意志動詞, V2 は常に無意志動詞でなければならない。(51) の V2 *θi* 「死ぬ」は動態動詞である

が、次の (52) の V2 *chêin* 「清潔な」は状態動詞である。すなわち、動態動詞であれ状態動詞であれ、無意志動詞であれば「他動詞 + 自動詞」という組み合わせの連結型動詞連続の V2 として現れることができるのである。

- (52) *ʔəwê thàv chêin ʔə mé*
 3sg 磨く 清潔な 3sg 齒
 「彼は齒を磨いてきれいにした」

以上に述べたように、この言語の形態統語論において意志動詞 / 無意志動詞の区別は重要である。もし (44) の表における C 類に形容詞という別個の品詞を与えたなら、無意志動詞としての特徴を持つ単語群は、動詞と形容詞という二つの品詞に分断されてしまう。これはこの言語の記述をする上で好ましいこととは思われない。加えて、意味的基準による動詞分類のうち、意志動詞 / 無意志動詞の区別を差し置いて、動態動詞 / 状態動詞の区別だけを特別扱いし、それらを動詞と形容詞という別個の品詞に属させることは極めて恣意的であるように思える。語彙的アスペクトに基づいて C 類を形容詞と呼び、A 類と B 類をまとめて動詞と呼ぶことが許されるのなら、意志性に基づいて、A 類を別扱いにし B 類と C 類を一つの範疇にまとめる品詞分類も不可能ではない。このようなことを見ると、形容詞という品詞を別個に設定することは妥当ではないと考えられる。

5. まとめ

言語学の特定の理論においては、例えば Croft (2000) のように形容詞を言語普遍的なカテゴリーと位置付ける立場もあり得よう。しかし、少なくともポー・カレン語という一言語の記述的研究に議論を限った場合、形容詞という範疇を設定することに積極的価値はないと思われる。3 で論じたように、動態動詞と状態動詞はこの言語の形態統語論の重要な部分において共通する振る舞いを示す。したがって、この言語の特徴を把握するという目的のためには、動態動詞と状態動詞を動詞という同じ範疇の中に入れて考えたほうが良い。また、4 で論じたように、意志動詞と無意志動詞という動詞分類がこの言語において有効であり、無意志動詞が動態動詞と状態動詞にまたがって分布していることを考えると、形容詞という範疇を設けることは、この言語の記述研究にとってはかえって妨げになる危険さえはらんでいる。Schachter (1985:13-20) は、形容詞を持たない言語は二つのグループに分けられるとする。すなわち、形容詞的な意味が主に名詞によって表される言語と、形容詞的な意味が主に動詞によって表される言語である。彼は前者を *adjectival-noun languages* と呼び、後者を *adjectival-verb languages* と呼んでいる。この分類を用いれば、ポー・カレン語は *adjectival-verb language* だということになる。

最後に、通時的な観点から、本稿で論じてきたこの言語の特徴について付言しておく。他のカレン系諸言語の文法に関する研究を見ると、スゴー・カレン語 (Sgaw Karen) についての Jones (1961)、ボエー・カレン語 (Bwe Karen) についての

Henderson (1997), カヤー語についての Solnit (1997) は, いずれも形容詞という品詞をそれぞれの言語に設定しておらず, 形容詞的な意味を表す単語を動詞と見なしている。Shintani (2003) のカレン系諸言語の系譜的分類に基づくと, スゴー・カレン語はポー・カレン語とともに Sgaw-Pwo Branch に属し, ボエー・カレン語は Bwe Branch, カヤー語は Kayah-Padaung Branch に属する。動詞から独立した形容詞を持たないという特徴が異なる branch に属する言語間に観察されるとすれば, カレン祖語 (Proto-Karen) 自体が adjectival-verb language であった可能性もあるだろう。もちろん, 結論を出すには様々なカレン系少数言語の形態統語法を精査してみる必要がある。

略号

| | |
|-------|-------|
| 1 一人称 | sg 単数 |
| 2 二人称 | pl 複数 |
| 3 三人称 | |

資料

例文に付した III-12.30 などの記号は筆者の資料における整理番号である。ピリオドの前が資料番号, ピリオドの後の数字が文番号を表す。資料のリストは加藤 (2004:549-552) に挙げてあるので参照されたい。

ポー・カレン語パアン方言の音素目録

| 子音 | | | | | | 母音 | | | | 声調 |
|------|--------|------|----|----|---|----|---|---|-----|------|
| p | θ[t~θ] | t | c | k | ʔ | i | i | u | má | [55] |
| ph | | th | ch | kh | | ɿ | | ʊ | mā | [33] |
| b[β] | | d[d] | | | | e | ə | o | mà | [11] |
| | | | ç | x | h | ɛ | a | ɔ | mâ | [51] |
| | | | ɣ | ʙ | | | | | (mə | 軽声) |
| m | | n | ɲ | ŋ | ɴ | | | | | |
| w | | | j | | | | | | | |
| | | l | r | | | | | | | |

韻母の目録

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|----|----|------|----|-----|------|-----|
| i | i | u | ai | aʊ | (ɿN) | əN | eiN | əuɿN | ouN |
| ɿ | | ʊ | | | aN | oN | | aiN | |
| e | ə | o | | | | | | | |
| ɛ | a | ɔ | | | | | | | |

謝辞

有意義なコメントをくださった二人の査読者に、この場を借りて謝意を申し上げます。

参 考 文 献

- Croft, William. 2000. "Parts of speech as language universals and as language-particular categories". In Petra M. Vogel and Bernard Comrie (eds.) *Approaches to the Typology of Word Classes*, Berlin: Mouton de Gruyter. pp.65–102.
- Henderson, Eugenie J. A. 1997. *Bwe Karen Dictionary, with Texts and English-Karen Word List*, (2 Vols.) London: School of Oriental and African Studies, University of London.
- Jones, Robert B. 1961. *Karen Linguistic Studies, Description, Comparison, and Texts*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 加藤昌彦. 1998. 「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」. 『言語研究』113. pp.31–61.
- 加藤昌彦. 2001. 「ポー・カレン語（東部方言）の関係節」. 『東京大学言語学論集』20. pp.275–300.
- 加藤昌彦. 2004. 『ポー・カレン語文法』. 東京大学博士論文.
(<http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/burmese/katoe.html> からダウンロード可能)
- Kato, Atsuhiko. 1999. "Two types of causative construction in Pwo Karen (the Eastern dialect)". In Shintani Tadahiko (ed.) *Linguistic and Anthropological Study on the Shan Culture Area*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. pp.55–93.
- 峰岸真琴. 2007. 「孤立語の他動詞性と随意性—タイ語を例に—」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動詞の通言語的研究』. 東京:くろしお出版. pp.205–216.
- Purser, W. C. B. and Saya Tun Aung. 1922. *A Comparative Dictionary of the Pwo-Karen Dialect*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 坂本恭章. 1994. 「タイ語の thammaj <なぜ> と不随意動詞の下位分類」. 『アジア・アフリカ言語文化研究』46–47. pp.409–414.
- Schachter, Paul. 1985. "Parts-of-speech systems". In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Volume I — Clause Structure*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.3–61.
- Shintani, Tadahiko L. A. 2003. "Classification of Brakaloungic (Karenic) languages in relation to their tonal evolution". In Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: historical development, phonetics of tone, and descriptive studies*, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. pp.37–54.
- Solnit, David. 1997. *Eastern Kayah Li: grammar, texts, glossary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

